

山形俊男教授が 紫綬褒章を受章

■ ■ ■ 日比谷紀之
(地球惑星科学専攻 教授)

21世紀 COE プログラム「多圏地球システムの進化と変動の予測可能性」の拠点リーダーである地球惑星科学専攻の山形俊男教授が、2005年4月29日、春の褒章発令において、学術、芸術上の発明、改良、創作に関し事績の著しい方を対象とする紫綬褒章を受章された。

山形教授は永年にわたって、地球流体力学および気候力学の研究と教育に打ちこまれ、大気と海洋に生起する諸現象や大気海洋間の相互作用に伴う気候変動の発生、およびその維持機構の解明に顕著な貢献をされてきた。

まず、非線形惑星波動の研究では、地球の大気海洋や惑星大気中の波動現象を支配している力学的バランスとして、それまでに提唱されていたものとは異なる新たな力学レジームを発見された。これは「中間地衡流力学」として確立され、

実際に、黒潮の大蛇行や木星の大赤斑など、地球や惑星に生起する多くの現象が、この力学レジームにより説明できることを示された。また、熱帯域の大気海洋結合擾乱に関する理論的および数値的研究では、大気と海洋が互いに影響を及ぼし発達しながら東進する結合擾乱が存在することを初めて明らかにされた。また同時に、その効果を取り入れた数値シミュレーションを世界に先駆けて実行され、現実のエルニーニョ現象と酷似した大気海洋結合擾乱の再現を通じて、その後のエルニーニョ現象に関する研究の飛躍的な発展に繋がる多大な貢献をされた。さらに、数十年規模の気候変動の重要性を提唱されるとともに、アジア・モンスーンの影響を強く受けるインド洋-太平洋域の大気海洋相互作用に関する研究の推進にも尽力され、今日では「インド洋ダイポール現象」として広く知られているインド洋熱帯域に固有の大気海洋結合現象を初めて発見されるなど、傑出した研究業績をあげてこられた。

以上のように、山形教授は複雑な大気



■ 山形俊男教授 (地球惑星科学専攻)

海洋系変動の本質に迫る研究、ならびに現実の現象の理解を深める独創的な研究により、国際的にも高い評価を受けてこられた。また、その一方で、地球フロンティア研究システムの設立や地球シミュレータの導入を始め、大型プロジェクトの推進にも多大な貢献をされるとともに、大学教育や大学院教育を通じて、数多くの優秀な人材を育成され、その功績は誠に顕著である。

理学部 1号館 II 期工事 竣工式典を開催

■ ■ ■ 平賀 勇吉 (事務長)

平成 16 年 12 月に完成した 1 号館第 II 期総合研究棟 (中央棟) は、既存の西棟との連携によって、最先端の理学研究をフレキシブルに展開できるよう配慮されており、理学系研究科・理学部のキャンパス各所に分散していた研究室の統合化や、建物の老朽狭隘状況が改善され、教育研究環境の整備が大きく進展したが、その竣工式典及び祝賀会が 7 月 5 日 (火) 午後 4 時 30 分から小柴ホールにおいて行われ、学内外から約 200 名の関係者が出席した。式典は、岩澤康裕理学系研究科長の式辞、古田元夫理事・副学長の挨拶に続き、文部科学省大臣官房文教施設企画部の金谷史明計画課長から祝辞が

述べられた後、長坂潤一施設部長の工事概要報告が行われた。引き続き、岩澤研究科長から工事にたずさわった関係 11 社の方々にそれぞれ感謝状が贈呈された。式典に続き祝賀会が小柴ホール前のホワイエで 5 時過ぎから行われ、山本正幸理学系副研究科長の挨拶、酒井英行理学系副研究科長の乾杯で祝宴が始まり、

倉知節株式会社鴻池組常務執行役員東京本店長から祝辞が述べられた。小柴特別荣誉教授、向丘弥生町会の代表の方々なども出席され和やかな歓談の後、午後 7 時すぎに散会した。また、同時間帯には施設見学も行われ、研究を紹介したパネルなどの前で教員の説明に聞き入る参加者など、各所でみられた。



■ 竣工式典の風景

理学系研究科 学生と教職員との交歓会の 報告

■ ■ ■ ■ ■ 中村 次郎（専門員）

大学院理学系研究科・理学部の定例行事となっている学生と教職員の交歓会（第41回）が5月23日（月）午後3時から理学系研究科附属小石川植物園に

おいて開催された。

当日はうす曇りにもかかわらず、各学科から選出された総勢21名の学生有志と職員との共同作業による準備のもと、新緑の園内にはおよそ650名を超えた学生・教職員が集まった。

会は岩澤研究科長、長田植物園長、小柴特別栄誉教授の挨拶に始まり、酒井副研究科長の発声で交歓会が開始された。

学生・教職員はもとより小柴先生をはじめ名誉教授の方々にも多数参加いただき、芝生には飲み物などを手に学科・専攻を超えて語り合う懇親の輪が幾重にも広がり、新緑を満喫しながら、和気藹々とした楽しい交歓のひと時を過ごし、午後5時すぎに散会した。



■ 交歓会の様子



■ 小柴特別栄誉教授と学生・職員

理学部化学館・4号館・7号館で自衛防災訓練を行った

■ ■ ■ ■ ■ 米澤 徹（化学専攻 助教授）

毎年、化学館、理学部4号館、理学部7号館ではこの時期に防災訓練を行っている。化学実験では、常に危険が伴う。万が一のときのために、こうした防災訓練を行うことは大切だと考えており、化学科3年生の学生実験のカリキュラムに

訓練が組み込まれている。今年は、4月21日に本郷消防署のご指導のもと、特に外国人留学生にも積極的に参加してもらい、総勢130名程度の規模で行った。

化学本館の学生実験室からの出火という想定で、消火栓ボタンによる火災発報、近辺の居室への通報、119番通報、非常階段からの避難を行った。人数を確認した後、二手に分かれて、消火器の使用訓練（写真左）と、室内消火栓からの放水訓練（写真右）を行った。消火器の

使用訓練は、安全ピンの取り外しなどの点に注意が与えられた。消火栓からの放水は、化学西館入口で西館建物に向かって行ったが、水の勢いが結構強く、二人で持って行った。

火事を出さないことはもちろんだが、万が一のときのために、避難口、消火栓・消火器の場所などをもう一度確認しておく必要があると強く認識した。また、この様子はその晩、NHKのテレビニュースで紹介された。



■ 防災訓練を行う外国人留学生

東京大学 21 世紀 COE (化学・材料系) 第 2 回合同シンポジウム — 次世代を担う科学の息吹き — 報告

川島 隆幸 (化学専攻 教授)

東京大学 21 世紀 COE (化学・材料系) 第 2 回合同シンポジウムが 6 月 3, 4 日に弥生講堂で開催された。今回のシンポジウムでは、化学・材料系の両拠点の研究を支える若手研究者に焦点をあて、化学、バイオ・生物化学、マテリアル、理論の四つのセッションにおいて、理学系、工学系それぞれ 12 名ずつが交互に発表した。発表者は、助教授 8 名、講師 1 名および助手 15 名で、企画通り科学の息吹きが満ちあふれる講演会となった。

また、ポスター研究発表では、両拠点のリサーチアシスタントに限らず、全博士課程大学院生および博士研究員に発表者の枠を拡大し、理学系から 57 件、工学系から 77 件、合計 134 件の発表と

なった。発表者と質問者の間で活気に満ちたディスカッションが行われ、同じ学内に居ながら日頃は交流の機会が少ない理学系と工学系との間の、貴重な研究の情報交換と交流の場となった。発表のレベルが高く、いずれも甲乙つけがたかったが、13 名がポスター発表優秀賞として選ばれ、閉会式で表彰された。

本シンポジウムは、COE 関係者の他、学部学生、修士課程の大学院生、および学外者と幅広い層が参加し、用意した要旨集 500 部が初日で品切れになるという有り難い誤算とともに、成功裏に終了した。なお、懇親会は工学部 2 号館展示室で、79 名 (教員 58 名) の参加の下に開催され、一層の親交を深めた。



■ 岩澤研究科長の挨拶



■ ポスター発表の様子



■ シンポジウムの会場風景



■ 岩田耕一助教授 (スペクトル化学研究センター) の発表